ちょっとそこまで ～お散歩日和（自然編）～

秋の日は釣瓶落とし

「秋の日は釣瓶落とし」とは、今の季節、あっという間に日が暮れることの譬えです。

しかし、「釣瓶」を実体験として知っている人は年々少なくなっているのではないでしょうか。この言葉が使われている有名な俳句があるので、知識としては知っているという人がほとんどでしょう。加賀千代女の「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」です。「釣瓶」とは、縄を付けて井戸の水を汲む桶のこと、または滑車も含めた装置を指す言葉です。その釣瓶を井戸の中に落とす際に、急速に落ちるため、秋の日の暮れやすいことを言い表した譬えとして形容的に使用されます。

しかし、最近は文字違いですが、笑福亭「鶴瓶」の方が有名かもしれません。彼の本によると、松鶴師匠から「どっか１つ抜けたとこあるしな……そうや、昔井戸で″つるべ″て使うてたやろ。なんやお前は、井戸のつるべのタガが抜けたみたいなとこあるし」という理由で「鶴瓶」の名を与えられた。とのことですから、由来は、この釣瓶にあるようです。

ところで、こういう暮れゆく街をイメージして、すぐに「暮れなずむ」という言葉を連想する人もいるかも知れません。ご存知金八先生のヒット曲「贈る言葉」の冒頭で、♪暮れなずむ町の光と影の中～と印象的に使われているために、その残像が先行するからです。

しかし、その意味を知ると、少し違うことに気付きます。「暮れなずむ」とは、暮れそうでなかなか暮れない状態のことです。「なずむ」は漢字で書くと「泥む」と書きます。はかばかしく進まないさま、思い通りに行かないことを意味します。

ですから、「釣瓶落とし」の秋には、この言葉はふさわしくないことになります。使う季節は春、日が長くなる時期でなければなりません。暗くなりそうで、なかなか暗くなっていかない光景なのですから。その点でも、彼岸前後の卒業シーズンにぴったりの歌詞ということになるのかもしれません。

ちなみに、この暮れそうでなかなか暮れない様子を表す「薄明（はくめい）」の時間についても触れておきます。薄明とは、上空の大気が太陽光を散乱させ、日が沈んだ後も空がぼんやりと明るく見える現象のことです。昔の人は「逢魔が時（おうまがとき）」と言い、映画人は「マジックアワー」と呼んでいます。三谷幸喜の作品を思い出す人もいるかも知れません。

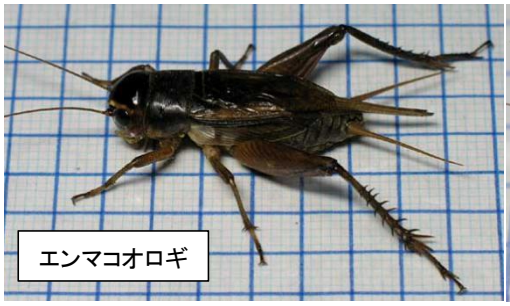
その昔、物知りの知人から、「夕焼け小焼けって言うだろ？　沈む太陽の方角に見えるオレンジ色の世界が夕焼けなんだ。でもな、反対側に目を向けて見ろ。すると、幻想的で趣きを全くことにする、ピンクや紫色の景色が広がっているだろう。これが小焼けだ。」と教えられて、長い間信じ切って、あちこちで知ったかぶりをして吹聴していました。恥ずかしい思い出です。

ついでに触れると、「日本国語大辞典」（小学館）の「夕焼け小焼け」の項に、「こやけ」は語調を整えるために添えたものと出ています。

さて、この季節を彩るのが虫の音です。その様子を表す季語に「虫時雨」があります。

「時雨」とは、「神無月ふりみふらずみさだめなき時雨ぞ冬のはじめなりける」（後撰和歌集）にあるように、陰暦十月になって降ったりやんだりを繰り返す雨のことを言います。したがって、「虫時雨」とは、時雨が降るように、虫の音が聞こえたり途切れたりしている情景を表していることになります。それも「松虫」や「鈴虫」などの美しい音色で鳴くことが条件です。

当団地で聞こえる虫の音の代表は、「ツヅレサセコオロギ」と「カネタタキ」です。



コオロギと言えば、誰もがエンマコオロギを真っ先に思い浮かべますが、ツヅレサセコオロギはそれよりは小ぶりで、鳴き声もコロコロした感じはなく、リィリィリィ…と、か細く哀愁を帯びています。「ツヅレサセ」とは何とも意味不明な名前ですが「綴れ刺せ」から来ています、「綴れ」とは破れを接ぎ合わせた衣服、ぼろの着物のことですから、冬に向けて着物の手入れを促しているように聞こえたことから名付けられたそうです。エンマコオロギ以上に一般的な虫ですから、もっと親しみやすい名称にすればよかったのではと思いつつ、だからこそ、文化の豊かさ奥深さを感じるのではとも思います。

コオロギで思い出すことが２つ。

１つは、ビートルズの「you never give me your money」のエンディングで、何故かコオロギの鳴き声が聞こえてきます。ヨーロッパイエコオロギだと思います。西欧人はこういう虫の音が騒音に聞こえると聞いたことがあるので、珍しいのではないでしょうか。この曲が入ったアルバム「アビー・ロード」を初めて聞いたのは中３の時でしたが、Ｂ面がまるで組曲のような作りになっていて、とても新鮮に感じたことを覚えています。

このヨーロッパイエコオロギについては、以前の勤務地近くに爬虫類専門店があって、生餌をたくさん販売していました。年中大量に、しかも安価で、多様な種類を入手できたので大変重宝しました。小学３年生の理科で昆虫の生態を学習するに当たり、その生餌を使って、「昆虫の体のつくり」と「変態の様子」の観察学習をしたからです。

もう１つは、愛新覚羅溥儀を描いた「ラストエンペラー」です。エンディングに、コオロギの入った小瓶が出てくるシーンがあります。どういう暗喩なのかベルトリッチ監督の意図は分かりませんが、中国ではコオロギを籠に入れて幸運の守り神とする風習があったそうですから、溥儀の受難を象徴したかったのでしょうか、それとも、長い間、器の中で閉じ込められていた自身がコオロギのように解放されたことを示唆しているのでしょうか。

カネタタキについては、鳴き声が「チン…チン…チン」と仏具の鉦（かね）を叩いているような金属音を出す所からこの名が付けられています。何とも物悲しく、それでいて、一度でも覚えてしまうと、あっちでもこっちでも微かに響いているので、急に親しみを感じる、不思議な虫です。個人的には、最も好きな秋の虫の音です。　　（終）